井　新　聞
（第３種郵便物認可）

これでいいのか 福井

生活保護 (上) 貧困は自己責任か

努力の果て壊れる心

芸能人の親族が生活保護を受けていた問題をきっかけに、受給者への風当たりが強い。「社会に迷惑掛けてるクズ」「宿主を殺す寄生虫は駆除すべき」…。ネットの掲示板には容赦ない批判が並んだ。県内でも保護世帯は増え続け、2011年度2801世帯と15年で倍増。100世帯に1世帯以上の割合だ。不正受給も増えており、16日には福井市で、保護費詐取の疑いも明るみに出た。批判の声に県内の受給者は何を思うか。耳をすませてみると、貧困の果てに立ちすくむ姿があった。（柴田裕介）

嶺南出身の30代前半の女性が、生活保護を受給しだしたのはごく最近だ。大学時代からアルバイトや派遣の生活を続けた末に、1人暮らしのアパートに約1年間引きこもった。「働けないのに生きたいというのは、自分のわがまま」と思った。どう死ぬかを考えるだけの毎日。「アパートの手すりで首をつる練習をした。ちょうどいい高さだった」という。

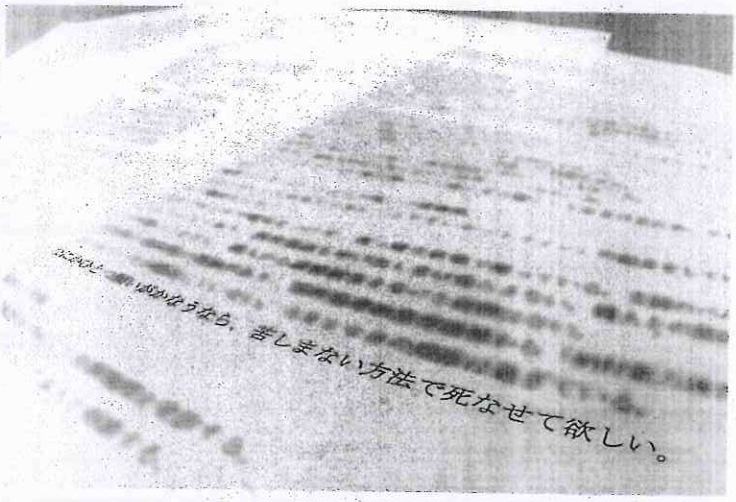
そんなときテレビで偶然、困窮者の電話相談を知り、生活保護申請の支援者に出会った。

幼いころ、父に突き飛ばされて11針縫った傷跡が、今も目立つ場所に残る。荒れた家庭だった。5歳のころ両親は離婚。母は生活保護を受給し女性を養ったが、「お前は畜生と同じ。殴らないと分からない」と女性をなじり、たたいた。

「服を買ってもらえないのが恥ずかしくて、中学校では誰ともしゃべらず勉強ばかりしていた」。だから勉強だけは、誰にも負けたくなかった。「中学を卒業したら働け」と言う母に、土下座して高校3年間、家に置いてくれるよう頼んだ。

■□■

「自分の人生をあきらめたくない」と、苦労を承知で大学に進んだ。成績は優秀。それで授業料を免除されたこともある。ただ奨学金と、スーパーのレジ打ちのアルバイトで全てをまかなう暮らしはつらかった。



30代前半女性の相談内容をまとめた文書。支援者に「苦しまない方法で死なせてほしい」と求めた

そんな女性に母は仕送りを求めた。自分の家賃を滞納しながら母を援助したが、大学3年のとき限界を迎える。10万円を封筒に入れ「これで縁を切ってくれなければ自殺する」と書いて送った。自分の命を盾にするしかなかった。もう経済的にも精神的にも、大学に通うのは難しかった。

大学を中退した後は、坂を転げ落ちるようだった。レジ打ちのバイトを20代半ばまで続け、ようやく就いた正社員の仕事でセクハラに遭った。「2～3年で正社員への登用試験がある」と言われた派遣の営業事務は、4年3カ月間勤めても試験なんてなかった。

30歳を過ぎ、女性は再び人生を立て直す決断をする。「生活の保障はなかったけど、思い切って派遣の仕事を辞めた。年齢的にもう後がないと思って」。運転免許を取得し、中古の軽乗用車を買った。職業訓練を受けパソコンの資格も取った。

化粧品が買えず、すっぴんで就職面接を受けるのが恥ずかしかった。服は3着を着回した。そうしてつかんだ仕事は、また非正規社員。「勤務3日目に突然大泣きしてしまった。なぜ泣いているのか、自分でも全然分からなかった」

以来、外出できなくなった。電気も付けず、穴蔵のような自室にこもった。昨年春のことだ。

■□■

女性は今、生活保護で医療費が免除され、心療内科に通う。その保護申請と前後して芸能人の謝罪会見をテレビで見た。「犯罪者みたいな扱い。自分が責められているようで泣いてしまった」

女性は貧困からはい上がろうとあがき、自力で穴の縁に手を掛けながら、また滑り落ちた。世間の「貧しいのは自分の責任」という風潮にたじろぐ。「生まれ落ちた環境は人によって違う。当たり前のものを何一つ、持ってない人間だっている。それを自己責任と切り捨てないで」

落ち着いて言葉を選ぶ女性。将来に夢はない。「今まで本当に生きるか死ぬかだったから、死ぬ心配のない生活がしたい」とだけ思う。

30代女性「切り捨てないで」